

こうすることこそ

大学宗教センター長 栗原 健

**13**災いだ、恵みの業を行わず自分の宮殿を  
正義を行わずに高殿を建て  
同胞をただで働かせ  
賃金を払わない者は。

**14**彼は言う。

「自分のために広い宮殿を建て  
大きな高殿を造ろう」と。  
彼は窓を大きく開け  
レバノン杉で覆い、朱色に塗り上げる。

**15**あなたは、レバノン杉を多く得れば  
立派な王だと思ふのか。

あなたの父は、質素な生活をし  
正義と恵みの業を行ったではないか。  
そのころ、彼には幸いがあった。

**16**彼は貧しい人、乏しい人の訴えを裁き  
そのころ、人々は幸いであった。

こうすることこそ

わたしを知ることでないか、と主は言われる。

**エレミヤ書 22 章 13-16 節**

今日の聖書箇所は、旧約聖書のエレミヤ書から取りました。エレミヤは、紀元前 620 年代から 580 年代にかけてパレスチナ南部のユダ王国で活躍した預言者であり、このエレミヤ書は、彼が伝えた神のメッセージを収めた文書です。

エレミヤは、イスラエル民族が神から離れてまやかしの信心に陥っていること、貧しい人々を虐げる搾取型の社会を造ってしまったことを非難し、実に 40 年にわたって人々を戒め続けました。彼の警告は、残念ながら時の権力者らには聞き入れられず、その結果、ユダ王国は新バビロニアによって攻め滅ぼされます。「バビロン捕囚」と呼ばれる悲惨な体験の始まりです。

今日は、エレミヤが語ったメッセージの1つに注目し、その中にあるヘブライ語の表現に焦点をあてます。この言葉が何を私たちに示してくれるか、若者たちに対する教育とどのように関わるか、見てみましょう。

今日の箇所ではエレミヤは、当時の国王エルヤキムのことを激しく非難しています。彼は、神が命じている王の職務は孤児や寡婦、寄留者たちを守ることであった筈だと

説いた後、エルヤキムの行いがいかにその使命から外れたものであるか、大胆に語ります。

曰く。王は、貧しい人々をただ働きさせて自分の宮殿を建てさせている。立派な宮殿に住んでいれば、自分は立派な君主だとも思ってるのか。あなたの父君(ヨシヤ王)はそのような支配者ではなかったぞ。父君がしたように、貧しい者たちの声に耳を傾け、彼らを支えることこそが、神を知る王にふさわしいことではないか。

国王に対してこのように語るということは、実に驚くべき率直さであり、身の危険を顧みない覚悟が伝わって来ます。エレミヤのこの不屈の信仰は、彼の時代にとどまらず、後世の人々にも大きなインパクトを残しました。

例えば、日中戦争に反対し、国際的孤立へと突き進む日本の現状を批判した経済学者の矢内原忠雄(1893年～1961年)は、エレミヤを大いに尊敬して自らのロールモデルとしていました。矢内原はこの批判のために東京帝国大学教授の地位を追われるのですが、正に身をもってエレミヤに倣ったこととなります。実に、エレミヤの叫びは今に至るまで世界にこだましていると言えます。

ここで注目したいのは、16節にある「こうすること(貧しい人々を支えること)こそ、神を知ることではないか」という言葉です。この「知ること」という言葉は、旧約聖書の原語であるヘブライ語ではハダート(ダート)と言いますが、非常に味わい深い言葉です。「知る」という動詞は、ヘブライ語の元々の形ではヤダァと言いますが、この言葉は多様な意味を持っています。単に「知識を得る」ことだけではなく、「密な関係になる」「ねんごろになる」「相手に知られる」「自らのことを明かす」「深く理解する」といったニュアンスもあります。その点を考えると、エレミヤはここで、「苦しんでいる人の声を聞いて彼らを支えることこそが、神とつながることだ。それが、自分自身の内面を理解し、神の思いを知り、正しい生き方を見つける道なのだ」と述べていることとなります。

なぜ、このような行動をすることが、神とつながることになるのでしょうか。無論、全ての人が「神のかたち」として創られ(創世記1章27節)、イエス・キリストの十字架と復活に示されるように神に愛されている以上、人が互いを大切にしようすることは当然なのですが、ここには、さらに踏み込んで考えるべきことがあります。

苦しんでいる人の存在は、常にその社会の矛盾点、その社会が見ないようにしている、ごまかそうとしている陰の部分を示しています。もしも、私たちがその上に安住して満足しているのなら、私たちもその社会のごまかしに加担していることになり、ひいては、私たち自身のごまかしそのものになってしまいます。それでは、エレミヤが批判している愚かな王の姿と変わりません。

社会の矛盾の下にいる人の声を聞くことにより、私たちは、自分に今まで見えていなかったものが見えるようになります。自分が目を背けていた自らの弱さ、視野の狭さなども理解すると同時に、このような世界の中で神が願っていることが何なのか、真剣に求めるよう迫られるのです。

他者と重荷を担い合って生きて行くことは、単に「困っている人を助けよう」という話

にはとどまりません。批評家でキリスト者の若松英輔は、「生きるとは、自分の知らないところで誰かが支えてくれていることに気がついていくこと」だと語っていますが(若松英輔・小友聡『すべての時には時がある』NHK 出版、78 頁)、まさに私たちは、他者を支えることを通じて、自分も支えられて生きて来たことに気付かされます。そうする中で私たちは、人間は決して「孤立した島」なのではなく、つながりの中で生きて行くように造られた、それが神の思いなのだを見出して行きます。実に、エレミヤが「こうすることこそ、神を知ることではないか」と述べた通りです。

私たちは、生徒や学生たちにも是非このことを知ってほしいと願っております。しかし同時に、ここには今の時代ならではの難しさも存在します。

学生たちが書いた文章などを読むと、社会の問題に興味を持ち、「自分もできることをして行きたい。人をケアする生き方をしたい」という思いがよく表わされています。実際、そのように行動している学生も多いです。と同時に、「自分のことだけで精一杯なのに、他人のことなんて考えられない」という声も、中には見られます。相反するようですが、実はどちらも若者たちの本音ではないでしょうか。

現代の学生たちを見ると、学業・アルバイト・資格取得などで疲れている上に、将来について明るい見通しを聞くことができないために、不安な気持ちを抱えていることがしばしばあります。「求められる若者像」について聞かされ過ぎて、「自分にはとても無理だ。こんなふうにはなれない」という思いに悩まされている人もいます。また、自分が否定されるのではないか、傷つくのではないかという恐れから、人と関わることを避ける人も見られます。そのために守りの姿勢に入って、初めから「私にはできない。そういうタイプじゃない」と予防線を張ってしまうことも、少なくないのではないのでしょうか。

私たちは一体、こうした若者の声にどのように応えたらいいのでしょうか。難しいことですが、私が時折授業で紹介している言葉があります。これは1つのヒントになるかも知れません。

カトリックのシスターで、寺本松野(1916年～2002年)という看護学の権威の方がいました。この人の言葉に、「人間は、自分だけのために生きようと思うと、つらいことがたくさんでてる」というものがあります(寺本松野『きょう一日を一寺本松野ことば集』日本看護協会出版、38頁)。

自分のことだけ守って生きようすると、人はかえって辛くなる。苦しくなってしまう。逆に他者の幸せに対して関心を向ける時、心の奥が広くなり余裕もできる。人間はそういうにできているのだ、ということですね。素朴な一言ですが、これは、看護という人の弱さに向き合う現場で培われて来た、深い人生の知恵であると言えます。このことを若者たちに伝えられるような仕事をしたいと、私たちも願っています。これもまた、エレミヤが言う「神を知ること」の一部となるでしょう。

最後になりますが、お知らせがあります。例年、本学では6月に「キリスト教教育特別集会」として、社会で活躍されているキリスト者の方を招いて講演会を開催しています。今年は講堂が改修工事で使えないため、外部の方ではなく本学の関係者の方

に講演をお願い、オンデマンドの動画配信にしました。8月5日までYouTubeで見ることができます。

講師の先生はお二人で、1人は幼児教育の熊坂聡先生です。先生は、ご自身でもNPO「みんなの居場所」を運営されており、障がいがある人のための居場所を提供して来られました。先生がなぜ福祉の世界に入られ、こうした働きを始められたのか。それはまさに社会が見ないようにしている落とし穴、福祉制度の狭間に落ちてしまった人と共に歩むためでした。そのことが動画の中で語られます。

もう1人の講師は、中高でも非常勤講師をされている、仙台長命ヶ丘キリスト教会牧師の金丸真先生です。講演の中で先生は、長年携わって来られた震災被災者の支援の話を中心に、創造主である神は人が間違ったところ、つまりいてしまったところからも、新たに道を造って下さるお方であると説き明かして下さいます。

どちらの話も、人を支えることが神を深く見出すことになる内容です。今日のエレミヤの言葉の実践応用編として、この動画をご覧いただけましたら幸いです。

(2024年6月19日)